［平成十一年度大会パネルセッション1］特別掲載1・垂加神道と国学

知の普及と地域社会

小林 准士

はじめに――「垂加神道と国学」というテーマ

ヘルマン・オームスは、『徳川イデオロギー』[1]の中で、垂加神道がイデオロギーとして完結した構造をもつことを主張した。確かに、垂加派の言説は、君（天皇）に対する臣民の本来的・根源的な依存性を前提とし、臣民が生死を貫いて君を守護すべき使命を負うことを神道の教えとしている。

いっぽう、本居宣長は、神代の事跡に「吉善事凶悪事つぎ〳〵移りもてゆく理リ」[2]を読みとり、皇統の永続性を弁証するものの、神々に対して人々を絶対的に受動的な立場に置く。このため、規範や使命観に基づいた実践を促す教説の存在自体が否定される。

さて、思想史においては、こうした両者の言説から、人間主体の意識構造を再構成することで、その意味が捉えられてきた。しかし、思想家が教説を構成することは、教えの内容を実践することとは、異なった次元に属する。また宣長が書いたテクストを読み、了解したとしても、政治支配を従順に受け入れることだけが読者の姿であるわけではないであろう。教えを構成し、人に提示することは、それ自体、教えの内容を実践することとは別の社会的実践であるし、テクストの享受に伴う実践は、主体の意識を再構成することだけでは捉えきれないものである。

以上のことを考慮に入れるならば、思想と社会の関係という問題を考えるにも、テクストの内容から再構成した意識のあり様を、社会的背景を引き合いに出して説明を片付けてしまうだけでは不充分であろう。むしろ、テクストの生産や普及の過程を通じて、どのような社会関係が形作られ、それが社会においていかなる力を発揮したのかを明らかにする必要がある。

そこで本稿では、手始めに、両学派における知の構成の仕方やその普及のための戦略に焦点を絞り、かれらが対抗的な諸言説が存在した社会空間においてどのようにして文化の次元でのヘゲモニーの掌握を試みたのかについて触れていくことにしたい。

1　「集大成」という言説戦略——垂加神道の場合

垂加神道は、当初、公家・京都近辺の朝廷と関係の深い神社の社家などへ浸透した。このことは、垂加神道の創始者である山崎闇斎がとった「集大成」という言説編成上の戦略と相関した事態である。[3] 当初、闇斎は『倭鑑』という歴史書の編纂を志していたが、編纂に必要な書物が朝廷や寺社に秘蔵されていたことも一因となり、その事業を中途で放棄せざるをえなかった。この障壁を乗り越えていく方途が「集大成」という言説編成上の戦略の採用であった。なぜなら、「集大成」とは、伊勢や吉田の神道説も含めた「諸家の奥秘」を、本来の「神道」から派生したものとして位置づけたうえで集成していくことにより、諸説の「偏私」を問題化していく作業であったからである。競合する存在をもつ公家や社家たちは、他家の書物や秘伝について知り得ない立場に立たされていたために、この闇斎のとった戦略に対しては弱味とともに関心をもたざるを得なかった。このために、彼らはみずからの家職の権威を維持あるいは創出するためにも、「集大成」というゲームへ参加し、垂加神道を受容したのだと考えられる。

2　「たゞ道を尋ねて明らめしるこそ、つとめとすべけれ」——宣長学派（鈴門）の場合

以上にみたように、垂加派の神道家たちは、それまで秘されていた知を公開させていく過程で、自らが編成した知の優位性を確保していったと考えられるのであるが、宣長の国学と対比した場合、知を普及していくうえでの戦略には対照的な態度が見られることも確かである。

たとえば、秘伝という知の授受のあり方を残したこと、出版に対して必ずしも積極的でなかったこと、闇斎の「真

意」が絶えず継承者にとって問題となるような師説への態度[4]、中央に秘伝授与の有資格者が存在し、許可をうけるために地方の門人たちは長期間にわたり上京する必要があったことなど、一連の関連する諸側面においてそうであった。

すなわち、垂加神道においては、秘書の公開というベクトルとともに秘伝維持による知の占有という相反するベクトルが併存していたのである。この理由は、さきほど述べたように、「集大成」という言説編成が、家職としての学問、祭儀の維持や創出という志向をもった公家・社家を垂加神道の枠内に組み込みながら、遂行されたということに因るだろう。しかし、出版文化が隆盛をむかえた元禄期以降において、そうした手段が有効であった局面は狭まっていった。実際、闇斎門下においても、神道の秘伝というかたちでの教えの授受の形態は、疑義の対象であり、維持しようとする側は弁解を迫られたのである[5]。いっぽう、本居宣長の場合、秘伝を否定し、自らの見解をできるかぎり書き著し、出版して広めようとしたこと、また師の説に拘泥しないよう説いたことなどは、すでによく知られていることである。ここで注目したいのは、こうしたかれの態度が、「道」の学問の構築や普及にあたっての戦略と密接に関係していることである。以下では、こうした側面について、とくに垂加神道との関わりに焦点をあて検討しておきたい。

『古事記伝』に収められた『直毘霊』の存在は、『古事記』の注釈という作業が、「異国」を反照とした「皇国」の自己像を、「道」＝「神代の事の跡」に結ぶことで構築していくものであることを示すとされる[6]。また、このテクストには、太宰春台『弁道書』に対する反論という文脈が存在することが指摘されている[7]。

こうした文脈をふまえて言えることは、宣長による「道」の構築作業が、徂徠派による「神道」否定を既成神道説に対する批判として転用し、そのうえで、「神道」否定に反論するという構えをもつものであったということである。荻生徂徠は、朱子学におけるような、「道」を教説のうちに言語化する作業を、対抗的な文脈の存在による所産とみなし、臆見とした[8]。この批判を、宣長は垂加派をはじめとする既成神道説に向けたのである。このため、宣長は学者を教えを説く存在ではなく、「道」がそなわる「神代の事の跡」を、古語の究明をとおして明らかにする存在として限定したのであった。

したがって、垂加派と宣長のあいだでは、「道」の構築の仕方とともに、学者の役割の位置づけの面でも、大きく異なっていた。しかし、「古学」の普及にあたっては、垂加派の存在が強く宣長に意識されていたことも確かである。たとえば、千家俊信への書簡[9]では、「何れも垂加流ニ而、

講尺も聴衆無之、古学弘マリかね申候由」という出雲での事態を、「穢敷漢意之神学而已被行候ハ、返々心うき御事」と嘆いている。だがいっぽうで、「古学」が流布していくにあたり、垂加派がむしろ橋頭堡の役割を果たす可能性も認識されていた。たとえば荒木田尚賢宛の書簡[10]では、

アキノ国柄崎八百道[11]生此方へも尋られ、一夜ゆるく晤語仕候、如仰垂加流ニ而残心ニ奉存候、併道ヲ大切ニ被存気慨甚シク候ヘハ、真ノ学者と存し候、今時古学之徒ハ、道を憂ル心ハナク、たゝ己が見解ヲノミ高シテ、軽薄ニ御座候、是古学ノ弊と奉存候、

とあるように、垂加派の人物は、「道」への志向を強く抱いている点で、もともと詠歌や歌学びを基礎とした社中の人々よりも、宣長にしてみれば、評価できる面が存在したのである。実際、各地の垂加派の人々が、宣長に入門し、「古学」へと転換していくという事例も見いだされるようになる。このことは、垂加派の知識人を、教説の授与者から、「道」を明らかにする学者に転換させていく意味をもったであろう。

むすびにかえて——地域社会との関係

宣長国学（鈴門）の普及は、門人たちが各地域において社中（多くの場合、歌会）を結成しつつ進行したが、これらの社中は、多くの場合、宣長への入門以前から、文化サークルとして存在していたことが知られている。[12] すなわち、鈴門は、各地域における文化サークル（社中）と、宣長を核とした文化サークル間のネットワークによって構成され、発展していったのである。

ところで、近世後期における文字文化の普及のあり方に関しては、社会の身分制的な構成に対応した階層構造の存在したことが指摘されている。[13] それらの指摘をまとめ、あえて単純化して示すならば、漢詩文や和歌の嗜みを基盤にして儒学・国学を学ぶ階層を頂点にして、俳諧などを嗜み通俗的な書物に親しむ文化的な中間層、寺子屋などで初等的な文字教育にとどまる層、そして無文字層という階層序列が存在し、この序列の上層に属する人々ほど、広域にまたがるネットワークを形成していたということになろう。

このことは、国学者の地域社会におけるヘゲモニー掌握の問題を考える場合、文化の階層構造における各社中の位置と役割を分析する必要があることを示している。天皇に対する権威の付与や、日本という単位での文化的同一性の創出、「古」の理想化という作業が歴史的にもった意味も、そのような分析の中で明らかにしていくべきなのである。

（『日本の近世―地域と文化―』梓出版社、一九九五年）など。

（島根大学助教授）

註

（1）黒住真・清水正之・豊澤一・頼住光子訳、ぺりかん社、一九九〇年。
（2）『古事記伝』七之巻（『本居宣長全集』第九巻、筑摩書房、一九六八年、二九四頁）。
（3）以下の、拙稿「垂加派知識人による正統性の生産」（『史林』八〇―三、一九九七年）を参照。
（4）この点については、樋口浩造「破門と義絶の学派」（『江戸の思想』五、ぺりかん社、一九九六年）を参照。
（5）「神道は秘事〳〵申候故哉、又ははつきとしたる教もなき故哉、幼年より儒を学候」（「谷秦山宛三宅尚斎書簡」『秦山先生手簡』一六四頁）などの言葉を参照。
（6）子安宣邦『本居宣長』第二章（岩波書店、一九九二年）。
（7）小笠原春夫『国儒論争の研究』第一章（ぺりかん社、一九八八年）。
（8）子安宣邦『「事件」としての徂徠学』第八章（青土社、一九九〇年）。
（9）寛政六年六月三日書簡（『本居宣長全集』第一七巻、以下書簡はこれに拠る）。
（10）安永五年七月三日書簡。
（11）唐崎常陸介（元文二年〈一七三七〉～寛政八年〈一七九六〉）。安芸竹原の神官。
（12）岡中正行「鈴門の階層」（『本居宣長と鈴屋社中』錦正社、一九八四年）。
（13）木村政伸「教育の階層構造と寺子屋の発展」（『地方教育史研究』5、一九八四年）、杉仁「在村文化の地域展開」